

日々 往来



田口 哲也

極東の小国が、当時の西列強の圧力や世の中の閉塞感に窮することなく、江戸から明治への社会的パラダイム転換をスムーズに実現できたのはなぜか。これについては過去さまざまな説明がなされてきたが、個人的にもっとも腑に落ちたのは、近代日本の第1世代として「国家をいじらしく、愛すべき存在だと見る感覚。どの分野を専門にしているにせよ、自分が背負ってやらないと死んでしまおうと思ってい」る「志士たちの存在を指

鳥取に再び維新は訪れるか

摘した言葉だ（『山崎正和オーラルヒストリー』）。
「御厨貫はか編より抄出」。 県民所得を増やしている。 33%（15年度）にとどまる。

話の次元は異なるが、強付会を恐れずに言える中で、身内びいきに、県内で意欲的な地域とどまらない質の高い製品やサービスを生み出すのづくりに取り組んでおられる方々からも、「鳥取でいくことが不可欠取をいじらしく、愛すべき存在だと見る感覚」が、今齊、社会人生活の活躍のエネルギー源となっておおむね定年期を迎えていることを感じさせられる場面が多い。こうして共通感覚が世代を超えて受け継がれていくば、今後ますます鳥取の大きな強みとなっていくはずだ。以上減少する姿が見込まれている。

県内では、折にふれて「鳥取県は1%経済だが新社会人にとっては、時ら」という類いのエクスが進むにつれ、今の上キユースが聞かれる。実司・先達の世代に比べ、際にわが国全体に占めるより一層ひとりひとりがウエートは、人口が0・キラリと光る存在となる45%（2018年3月1チャンスが広がっていく日現在）。県内総生産に筋合いにある。まずはそついでみると、最終需要れぞれの持ち場で、からの約4分の1が県外に奪だを大切にしながら健闘される構造となっている。ことあり、GDPの0（日本銀行鳥取事務所長）